

「アミ 小さな宇宙人」
ファンブック
ありがとう、アミ。
みんなで手を取り次の世界へ



奥平亜美衣 / 曾根史代 (Roy)

アミのファンのみなさま



ヒカルランド

『小さな宇宙人アミの言葉』出版記念セミナーで語られた奥平亜美衣さん、アミプロジェクト曾根史代さん、そして日本語版『アミ』シリーズを手掛けた編集者=ヒカルランド石井社長の貴重なアミエピソードを本書でついに解禁!!

ありがとう、アミ。

はじめに

本書は、2017年4月8日に行われた奥平亜美衣さん著『小さな宇宙人アミの言葉』（ヒカルランド）刊行記念セミナーの内容をほぼまるごと第一部にて紹介しております。

第二部では、同書にて募集した、読者のアミにまつわるお話、「AMI Your Story」に寄せられた読者さまからのお手紙やメール、そして、17年以上前に新装丁にて出版された『アミ 小さな宇宙人』（徳間書店）シリーズ3部作の読者さまより、当時いただいたファンレターの一部をその方の現在のご様子とともに紹介しております。

はじめに

第三部では、2002年に出版されました『エンリケ・バリオス アミの世界』
(徳間書店)の内容を一部再編し、載せております。

目次

はじめに

002

第一部 『小さな宇宙人 アミの言葉』（ヒカルランド）刊行記念セミナー

「アミを語る会」が実現！

009

生きる基準を「愛」に変えたアミとの出会い（奥平亜美衣さんの場合）

013

変容をもたらしたアミとの2度の出会い（曾根史代さんの場合）

018

石井さんとの出会い

024

人生を好転させたアミとの出会い（石井健資社長の場合）

026

みんなのアミとの出会い・それぞれの体験をシェア

031

アミからメッセージをもらおう！

066

質疑応答

093

セミナーまとめ

114

第二部

みんなのアミストーリー（読者編）

『AMII Your Story』よこ

120

アミがあなたにもたらしたもの（タイムカプセル）

131

第三部 『エンリケ・バリオス アミの世界』(徳間書店)より

石井編集長のかっとう (2002年当時) 144

エンリケさんに質問 147

あとがきにかえて 164

装丁 MAYUIMI
校正 麦秋アートセンター

本文仮名書体 文麗仮名(キャップス)

第一部

『アミ誕生30周年 次の世界へあなたを運ぶ』

小さな宇宙人 アミの言葉（ヒカルランド） 刊行記念セミナー

2017年4月8日

SCHEDULE

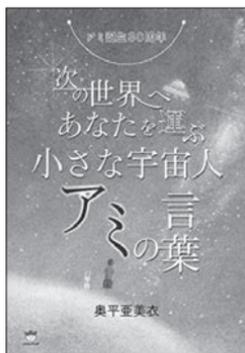
- ご挨拶
- あなたも『アミ』に会おう！
誘導瞑想
- ※ アミのオーディオブック（朗読 CD）を
聴きながらの誘導瞑想
- 『アミ』にまつわるエピソード！
- 『アミ』からメッセージをもらおう！
- みんなのアミエピソード！ & 質疑応
答タイム

「アミを語る会」が実現！

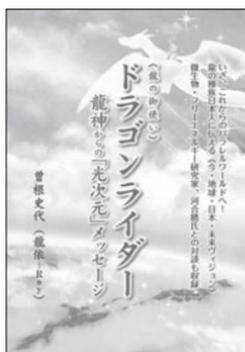
奥平 皆さん、こんにちは。奥平亜美衣です。きょうは天気も悪くて、ちょっと寒い中、お越しいただきましてありがとうございます。

ここでアミのイベントをしていることが本当に信じられないような思いです。私にとって、アミとの出会いはすごく大事です。本日まで一緒にさせていただく曽根さんとは、アミのつながりの中で、私が本を書くもつと前に出会っており、きょうこうしてイベントを一緒にさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。(拍手)

曽根 曽根史代と申します。「アミプロジェクト」の代表をしております。さっき(セミナー開始前に司会より)ご紹介いただいた中で「セラピスト龍依くROY」という名前もあがっていたと思います。その名前でも本を書かせていただいているので



奥平亜美衣さん著



曾根史代 (龍依~Roy) さん著

すが、そちらの本ですか、スタジオのほうに足を運んでくださったり、ブログを読んでいただいている方には「龍依~Roy」という名前のほうが親しみがあるかもしれません。本名は曾根史代と申します。

「アミプロジェクト」の活動を始めてから、もう10年以上がたちました。実はきのう、きょうはどんな会になるかなということでもアミと対話をしました。アミも楽しみにしてくれていましたし、私自身も楽しんで参加させていただきたいなと思っております。きょうはアミ好きな人ばかり集まっているんですよ。アミが嫌いな人——いませんね。「はい」とか言われても困るんですけれど(笑)。アミ好きの人ばかり集まって

くださっていると思いますので、ぜひアミと一緒にいるような気分になって楽しんでいただけたらと思います。よろしくお願いします。（拍手）

奥平 早速、瞑想のほうから入らせてください。

——朗読CDが流れる——

曾根史代さんによるアミに会う誘導瞑想（約30分）

奥平 皆さん、どうでしたか。私、今日初めてこちらを体験しました。私はイメージとかが見えてくるほうではないのですが、完全にここじゃないどこかにいた感じがしました。

曾根 よかった。アミが来てくれました。

奥平 そうなんです。びっくりしました。

曾根 ありがとうございます。皆さん、どうだったでしょうね。また後で聞きますね。

奥平 アミとの出会いや、いろんなことをシェアできたらと思います。

ここでもう1人ゲストを呼びたいと思います。皆さんきょうはヒカルランドパーク（セミナー会場）に来ていただいているのですけれども、ヒカルランド社長の石井さんです。（拍手）

石井 初めまして。ヒカルランドの石井と申します。よろしくお願いいたします。

奥平 石井さんを知っている方、いらっしゃいますか。

石井 きょうは完全アウェーです。ヒカルランドパークに来てくださるいつものお客様さんとまったく違うので、緊張してしまいます。本当にありがとうございます。

奥平 実は石井さんは、ヒカルランドをつくる前に徳間書店にいらっしゃって、そのときに『アミ 小さな宇宙人』を日本に紹介したというか、日本でこの本をつくった編集者の方なんです。つまり、石井さんがいなければ、皆さんもアミに出会うことはなかったんです。

生きる基準を「愛」に変えたアミとの出会い（奥平亜美さんの場合）

奥平 私とアミとの出会いをお話しします。

2010年、7年ぐらい前になります。もちろん本は書いていないし、ブログも始めていないときです。当時は普通の会社員で、スピリチュアルの「ス」の字も知りませんでした。もう32〜33歳になっていましたが、私はかなり普通に生きてきて、昔から何か能力があったとか、いろんな不思議なことを体験したとか、そんなことはまったくありませんでした。普通の家庭の普通のお父さんとお母さんのところに生まれて、「ちゃんと勉強して、いい大学に行って、ちゃんと世の中のために働くことがいい人生だよ」という価値観の中で普通に育ったんです。ただ、結構早いころからそれに疑問を感じていました。疑問を感じつつ、「でも、まあそうなのかな」みたいな感じで

普通に大きくなって行って、世間でいいとされていることを目指して生きていたのです。

大学生になると、周りのみんなは就職活動をバリバリして、いい会社に決まってきました。だけど、私はそれにどうしても疑問を感じてしまって、就職活動をまともにしていなかったんです。その後、親には申しわけないと思いつつ、自分のやりたいことをやるために一歩踏み出して、海外に行ったりもしました。でも、本当にやりたいことって何だろう、生きているって何だろうということに対しての答えは得られなのまま、30歳を過ぎて世間的に結婚するような年齢になって、たまたま相手がいたら結婚するという人生を送っていたのです。

就職活動はしなかったのですけれども、20代後半ぐらいになって、当時は世間一般的な常識の中で考えていたので、さすがに仕事をしないとまずいだろうということで、会社員になりました。スピリチュアルの「ス」の字も知らないし、本当に何も知らなかったんです。それが、会社員をして、「何のために働いているのか」とか「人生ずっとこのままなのか」といった、疑問がどんどん大きくなってきて、そんなときに

会ったのが、『アミ、小さな宇宙人』だったのです。

どうやって出会ったかというのは、実ははっきりと覚えていません。何か別の本をアマゾンで見ているときに、レビューで誰かがアミのことを書いていて、そこから『アミ、小さな宇宙人』のページに飛んで、そのレビューを見たときに、「これは読んでみよう」と思って買ったのが最初だったと思います。読むと、最初のほうに「神は人間のかたちをしていない(中略)かぎりなく純粋な愛だ……」というふうに出きます。そこでいろいろなことが氷解したんです。

私は日本で無宗教で育った身ですけれども、あるときインドネシアに行くことになりました。インドネシアはイスラム教徒がほとんどでした。ただ、私が住んでいたバリ島にはヒンズー教徒が多くいて、ほかの島にはキリスト教徒もいました。私はインドネシアで少し働いていたのですけれども、当然職場にはいろんな宗教の方がいました。そのころから「何で日本人の私は宗教がないのだろう」という疑問を抱きまして、「宗教とは何だろう」と、わからないなりに考えていました。インドネシアでは宗教ごとに行事とか休みが違います。宗教が生活のベースで、日本人にはよくわからない

世界です。会社の休みはその人の宗教によって違うわけです。食べてはいけないものとか、いろいろな習慣も違っていました。向こうは生活のベースがすべて宗教だったのです。

この本『アミ 小さな宇宙人』で「神というのは愛なんだよ」というのを読んだときに、はっきりわかったわけではありませんでしたが、「ああ、そうか」という感じで、「宗教というのは、結局、愛なんだ。いろんな宗教があるけれども、もとはすべて同じなんだ」ということが急にわかったんです。

アミに出会って、私の中で大きく変わったことの1つは、肉を食べなくなったことです。この本『小さな宇宙人 アミの言葉』では、お肉に関する記述はわざと外しましたが、私自身は『アミ』を読んだ次の日からお肉を食べなくなりました。それまでは、普通に生きていて、普通にお肉を食べていました。インドネシアでは、イスラム教の人は豚が食べられないとか、ヒンズー教の人は牛肉がだめとかいうことがあるのですが、誰に聞いても「宗教がそう言っているから」という答えしか返ってきませんでした。何でなのかはわからないけれども、「そういうのがあるんだな。でも、私

には関係ないな」と思ってたんですけど、

『アミ 小さな宇宙人』の中には、「肉はウシの死骸さ」という一文が出てくると思いますが、それを読んだときに、「この肉はだめ。あの肉はだめ」ではなく、肉はだめなんだ、肉は動物なんだというところで、今までの外国での経験が全部つながってきたのです。今は肉を食べたらだめとかはまったく思っていない。食べてもいいと思うのですけれども、この一文で、進化した人が肉を食べなくなるという感覚はわかるようになりました。

愛が何かというのは、読んだ当時は、まだわかりませんでした。だけれども、それを考え始めたことと、愛に従って生きていくことが進化なんだという1つの基準ができました。それまで世間一般の基準で生きてきたところに、アミに出会って、「愛とは何なのか」ということの自分なりの答えを少しずつ出していくことが、1つの生きる基準、行動の基準になることがわかりました。それがアミに出会って変わったことです。

アミの本は衝撃でした。読んですぐに1巻を文庫本で20冊ぐらい買って、友達とか

に配りました。無理に広げようとしたわけではありませんが、「これが広がったらいな」という思いは持っていて、いろいろ探すうちに「アミプロジェクト」に出会ったんです。それを主宰されていたのが曾根さんです。

曾根 「アミと出会う」「アミとミーティング」という意味で「アミーティング」というイベントをしていたときがありまして、そのときに来ていただいたんです。

変容をもたらしたアミとの2度の出会い（曾根史代さんの場合）

曾根 私が「アミプロジェクト」を始めてから10年以上たちます。私のアミとの出会いをお話しします。

私はアミとは2回出会っています。1回目は普通に本で出会いました。これもちょっと不思議というか、偶然とは思えない必然の出会いだったりします。今日はその部

分は割愛しますが、アミの本を読んだときに、「ウワツ、すごい。これ、私の母に読んでほしい」と思ったんです。なぜかというところ、母はそのころ、急に耳が聞こえづらくなっただけです。突発性難聴とはまた別の、原因不明の難聴で、すごく落ち込んでいました。私は「これを読んだら、きっと元気になるに違いない」と思って、母に「これ読んで」と言いました。でも、想像してみてください。すごく元気だったのに、いきなり耳が聞こえなくなると、やっぱり落ち込みますよね。ですから母も、すぐには読めなかったのですが、しばらくして、急に「やっぱりあの本が読みたい」と言ってきて、1晩か2晩で、すごいスピードで3巻全部読んでしまいました。

母は、すごい勢いで私のところに来て、「なんてすばらしい本なの!!、映画にして！アニメにして！」と言ってきたんです。私は「いいアイデアだけれど、私じゃなくてもっと名のある人やお金がある人がやってくれるよ。こんなにいい本だもの」と言いました。だけど、母は鋭い一言を言うのです。「この本は20年前に書かれたんだよ。それでもまだ誰も映画にしていないのでしょうか？」と。確かにそうです。私は子ども向けのテレビ番組の制作などをしていたので、制作現場を知っていれば知っているほ

ど、映画をつくることがどれだけ大変なことかわかっていたので、「いやいや、私じゃなくてね」と言っていたのです。でもその後、「やらなきゃだめでしょう」「いつやるの」そういうシンクロがどんどん起きてきたんです。それでようやく、私に何かお役目があるのだったら、できることからさせていただけこうと思って、やっと重い腰を上げたんです。それが「アミプロジェクト」のスタートでした。

それが1回目の出会いです。

2回目の出会いの前に、著者のエンリケ・バリオスさんに連絡をとったのですが、そのときに、すぐに「やりなさい」という返事をいただきました。詳しいことは割愛しますが、それですごく勇気をもらったのです。でもそのときに「アミのプロジェクトを何かしようとする、いろんな妨害が入ったり、大変なことがあるよ。だから気をつけて」と言われました。妨害と言っているのかわかりませんが、確かにおやけに話せないようないろいろなことがあります。今は笑って話せますけれど、傷つくこともすごくたくさんありました。だからといって、アミの世界と正反対の気持ちでアミプロジェクトの活動をするのは、ちょっと違うと思っていました。

そこで、私は自分の心を整えたいなと思って、自宅の近くにある公園に毎朝、散歩に行きました。そこは、アミの本の中にも登場する「アトランティス」時代の気が広がっているところなのです。そこでいろいろなプラーナ（宇宙エネルギー）をたくさん受けとっているうちに、散歩に行く時間がどんどん早くなっていきました。最初は8時くらいに出かけていたと思いますが、公園に行くために朝起きるのがだんだん喜びに変わってきて、朝はそんなに得意なほうではないのに、7時になり、6時になり、5時になり、最後は4時になったんです。薄暗いし危ないじゃないのと言われましたが、そのころはまだ季節的に明るいときだったので大丈夫でした。毎朝のように出かけて宇宙エネルギーを受けとっていたら、いろいろな植物の声などがどんどん聞こえ始めたんです。

私はそのころ瞑想やヨガなどはまったく知らなかったのですが、勝手に体が動いて、瞑想ヨガをしたり、自然や植物、体の声と対話するようになりました。

そのころ、アミと再び会いました。きょうも誘導瞑想で皆さんのところにアミが来てくれましたが、私が瞑想していたときにもアミが宇宙船からおりてきて、私の肩こ

しにピタッと寄りそったのです。「あれ、アミが来た」と気づいたときには、アミが私を連れて自分の宇宙船に上っていったんです。アミと一緒に宇宙を見て、言葉も交わして帰ってきたという経験をしました。

ところで、アミの本の中に「動物の死骸を食べるなんて!!」というお話が出てきますね。ちょっと伺いたいのですが、アミの本のそのくだりを読んで、「私も実はそれ以来食べられない」とか「2、3日ぐらい食べられなかった」とか「食べてはいるけど、何か思うところがあった」とか、何かしら影響があったという方はどれぐらいいらっしゃるでしょうか？

——（会場で受講者たちが手を挙げる）——

やっぱり結構多いですね。私の場合、アミと会って以来、植物との対話がますます活発になって、見えないものが見え始めて、そのうちに、何とお肉が食べられなくなりまして。自然とそうなったのです。テリからスワマに変わったような感じですね。私はテリのように狂暴ではなく普通でしたけれど（笑）、急に「あれ？ 私、お肉食べられないな」と体と心で思ったのです。そのうち、マグロなどの大きいお魚が食べ

られなくなりました。しばらくすると、中ぐらいのお魚まで食べられなくなりました。またしばらくすると、小魚も食べられなくなりました。そのうちに、何にも食べないほうが元気だなど思って、1カ月くらい食べないこともありました。でも、元気なのです。

奥平 断食ですか。

曽根 意識して断食していたわけではないのですが、私は食べないほうが元気でいれるなと思えて食べなかったのです。早朝の瞑想ヨガでプラーナ(宇宙エネルギー)をいっぱいもらって、それが栄養になってるので、食べなくていいんです。本当に元気でした。でも、人間だから、食べないとちよつと痩せてくるんです。そうすると心配されて、余り痩せ過ぎるのもよくないし、コントロールして食べようかなということ、最初は野菜や果物から食べ始めて、小魚も少しいたでいて、今は焼き魚などでしたら一応食べられます。あまり大きいお魚じゃないほうがいいですね。お刺身などは、どんな魚も絶対無理です。食べたらいれと仲よしになっちゃう。もちろんお肉はすべて無理です。それは本当に変容です。アミとの出会いによって、心と体の次

元が変更したのですね。

そんな2回目のアミとの出会いでした。

石井さんとの出会い

曽根 私は、エンリケ・バリオスさんから、石井さんを紹介してもらいました。石井さんと初めてお会いしたのが、おそらく11〜12年前です。石井さんは、そのときすでに、出版社の編集長です。私は独立して制作会社を始めていたのですけれど、いくらエンリケさんからの紹介とはいえ、まだ若いただの女性です。やはり、それなりに緊張しているわけですね。ところが、石井さんは、私と目が合うなり、「曽根さん、曽根さん、こっちこっち、おいでおいで」と親しい友人のように迎えてくださったんです。「私、この人のことを前から知ってた？」という錯覚を起こすくらい、すごく気

さくに受け入れてくださったのです。アミの本を日本語で出版するまでもいろいろなことがあったと聞きましたが、そんな石井さんだからこの本が出せたのじゃないかなと思ったのを今でも記憶しています。

奥平 私が石井さんに出会ったのは、自分が本を書いた後ですけれども、その前に、1回、出合いがありました。それは、『アミ』を読んだ後に、さくらももこさんがあとがきを書かれていて、そこに石井さんの名前が出てくるんです。石井さんは著者でもないし、絵を描いた人でもないのに、なぜか名前を覚えていました。でも、当時は自分が本を書けるとかはまったく思っていなかったもので、自分と遠い世界の方だと思っていたんです。でも、自分が本を書くようになってから、ヒカルランドさんを紹介してくださる方がいて、まさにこの場所で初めてお会いしたんです。

『アミ』を読んで、石井さんの名前を見たときから考えると、今、私がここに石井さんと並んでいるのは、本当に信じられないことが起こっているとしか言えない状況で、それもアミが導いてくれたことかなと思っています。

石井 皆さん、さすが作家の方で、すばらしいお話の後にちょっと気が引けるんです

けど。私は最近、物忘れがひどくて、きょうここで3人で鼎談ていだんするといふのもさつきまで忘れていたものですから、準備もなくてすみません。

人生を好転させたアミとの出会い（石井健資社長の場合）

石井 先ほどの話でいくと、僕はエンリケ・バリオスさんとは3回旅行しているので、人となりをそれなりには存じ上げています。エンリケさんに会ったときに、彼は「僕はアミじゃないよ。みんな僕のことアミと思って近づいてくるので、僕はそれがすごく困るんだ。僕はクラトだよ」と言っていました。お肉は召し上がっていました（笑）。その話もあるのですが、とにかくこの原稿が来たときのことを、今ちょっと思い出しました。訳者の石原（彰二）さんはスペイン在住の画家の方だったので、版權も何もないときに、この本に出会って衝撃を受けて、翻訳なんかしたことがないし、

何の当てもないのに翻訳しちゃった。それを日本にいる友達に送ったんです。当時ですから、400字詰め原稿用紙です。なぜかマス目はまったく関係なく、はみ出して、はみ出して、はみ出して書いている原稿でした。

初めての翻訳ということで、例えば、形容詞1個にいろんな訳がついて、それが4つぐらいみんな書いてあるんです。そんな感じで、ものすごく克明に書き込んでありました。申しわけないですけど、商業出版にそのまま出せるものではなかったのですが、持ち込んできたお友達は、私に会ったときにはちよっと疲れた感じで、「実は、ここに来る前に出版社を12社も回ってきて、全部断られた。13社目に徳間書店に来た」と言っていました。

そんなこともあったので、僕はその情熱に打たれまして、これはしっかり読んであげなきゃいけないなということで、忙しかったのですが、読みましたら、大変すばらしく、夢中になってしまいました。あまりそういうことはやったことではないのですけれども、何とかこれを世に出そうということで、ライトというのを初めてやったんです。そのときは内容もよく覚えていたのですが、今は申しわけないのですが、あ



日本で初めて出版された際の装丁

まり覚えていません。でも、本当にすばらしい。僕の人生そのものが、この『アミ、小さな宇宙人』から好転したのは間違いのない事実です。

これが一番最初に出した本です。知っている方もいらっしやると思いますが、これは画家の石原さんが描いた絵です。石原さんのたっぺのお願いもあつたので、それをそのままカバーにしました。僕は、これはすぐに10万部売れると思っていました。ところが、なかなかそういう状況にはならなかった。何か違うのかなと思っていました。と、パウロ・コエーリョさんの『ピエドラ川のほとりで私は泣いた』（角川文庫）という本のイラストを描いた方とたまたま会いました。コエーリョさんは売っていた

ので、コエーリョさんのイラストを描いた方ずつくろうと思つてつくつたのが『戻つてきたアミ 小さな宇宙人』になったんです。これが1996年で、最初の『アミ』は何と1995年ですので、21〜22年たちました。その前に、18年から20年、原書が出ていたので、これから長く読み継がれる本になって、本当にありがたいなと思います。

当時、さくらもこさんは『富士山』という雑誌を新潮社さんから出していました。初刷50万部ぐらいの勢いがあった雑誌でしたが、そこでこの2冊を取り上げてくださったんです。「このすばらしい本を皆さん読んでください」ということで、大変推奨してくれました。それで私は、お礼がてら連絡をしまして、まあどうせ無理だろうと思いつつ、とりあえず言つたもん勝ちで、「実は第3弾もあるので、『アミ3度めの約束』のイラストを描いてくれませんか」と無心してみました。そうしたら、何と、「とにかくすぐ会いましょう」ということになって、お会いしました。そうしたら、この2冊も含めて、3冊とも全部装丁を担当してくださいとのことでした。何ともありがたい、信じられないような出来事が起こりました。多分、皆さんのお手元に届いている『アミ』

小さな宇宙人』3部作は、さくらももこさんのカバーイラストがついたものだと思うのですが、それがきっかけで、ようやく『アミ 小さな宇宙人』がヒットしました。初期の1995〜1996年から、その1年後か2年後に、さくらももこさんからそういう話をいただいたのです。

その後、さくらももこさんがエンリケ・バリ奥斯さんにお会いしたいということで、仲介の労をとらせていただきました。当時、エンリケさんはスペインにいたので、スペインに行く手配を始めましたら、直前になって、エンリケ・バリ奥斯さんが、何と、「僕は今、タスマニアだよ」と言ってきた。エーッと思つて、慌ててスケジュールを変えて、さくらももこさんたちとタスマニアに行つて初めてお会いすることになりました。そこでいろいろなお話を聞いているのですけれども、その後は取材を兼ねてスペインにも行つて、エンリケさんの息子さん夫婦と一緒に旅行したりもしました。その後は日本にエンリケさんが来てくださつて、一緒に京都旅行をしたり、そういう交流の中で今に至っています。

奥平 なかなか聞けない話ですね。さつき石井さんが「アミ」に出会つて人生が好転し

た」とおっしゃったのですが、そう考えると、私もそうかなと。

曽根 私もです。

奥平 例えば、私は「ここにアミがいる」とかいうことを感じるほうでは全然ないのですけれども、それでも、もとの本を読んで何かを受け取ったら、それはアミがいるというか、伝えてくれているということだと思えます。それに導かれて、皆さんはきょう集まられていると思います。

みんなのアミとの出会い・それぞれの体験をシェア

奥平 もしよかったら、皆さんの中で、アミに出会って、ここに感動したとか、こんなことが変わったとかいうことがあったら教えていただけたらと思うのですけれども、どうでしょうか。